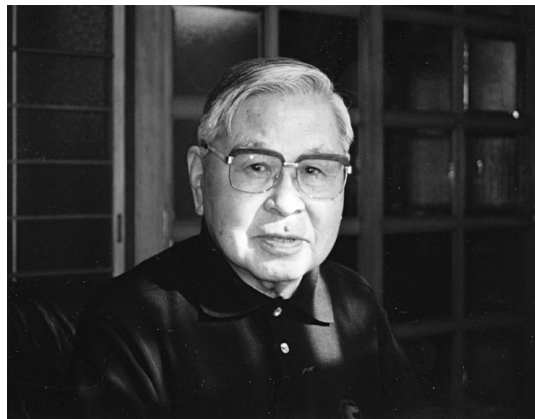


訃報 Obituary

鈴木正将先生 (1914-2011)



鈴木正将先生 ご自宅にて
(2011年8月28日, 86才11カ月の頃)

本会名誉会員（動物分類学会と染色体学会でも名誉会員）で広島大学名誉教授の鈴木正将先生が2011年1月18日に逝去された。96才だった。日本のザトウムシ分類学の開拓者で、鈴木先生によって新種・新亜種として記載されたザトウムシは国内産で約80、国外産で150を超えている。また綿密な探求でシノニム関係を明らかにして抹消した学名も多数に及ぶ。国内産のザトウムシは約80種であるが、そのうち約75%が鈴木先生によって記載されており、日本産のザトウムシ分類の骨格は鈴木先生によって築かれたのである。日本のザトウムシ分類は種内の地理的分化などの面ではまだ多くの課題を残しているが、未記載種が次々と出てくるという段階は、鈴木先生が広島大学を退官された1978年の時点でも、すでにほぼ過ぎていたといっても言い過ぎではない。クモガタ類研究におけるもう一つの大きな業績は真正クモ類の染色体研究である。ザトウムシでの業績もそうであろうが、この染色体研究の内容も本会内部ではあまり知られていないと思われるので、あとで簡単な解説をつけて紹介したい。なお、以下の記述は若干の資料（鈴木1978など）のほか私がかつて個人的に鈴木先生から伺った（奥様の昭子様からもいくつかお聞きした）話に基づく。「と…聞いた」とか「…したそうである」とかの記述はだいたい後者と考えていただいて間違いない。

鈴木先生は1914年9月13日に埼玉県志木市本町において、父鈴木百太郎、母つるの間に、13人兄弟の12番目（7男）として生誕された。論文では一貫して「せいしょう」を使用しているが、「正将」の本当の読みは「まさゆき」である。実家は1500坪もの土地をもっていたが3代目で消失したとお聞きしたことがある。旧制川口高校の出身で、後輩にはハムシの専門家の大野正男氏（東洋大学名誉教授）がいる。そこを卒業後、

1933年に広島高等師範学校理科第三部に進学された。鈴木兵二広島大学名誉教授（コケ類分類学）は同期である。同校には京都大学の駒井卓教授の研究室の出身でキリギリス類の染色体を研究されていた晴山省吾氏が教授でおられた。

1937年に広島高等師範学校を卒業ののち、同年に広島文理科大学（広島高等師範学校とともに、現在の広島大学の前身）生物学科動物学専攻に進まれたが、進学後まもなく、講師になられた直後の佐藤井岐雄博士（1902-1945）のもとでザトウムシの分類研究に取り組みられるようになった。佐藤博士は日本産サンショウウオの分類研究の草分けとして著名だが、学位はサソリの精子形成や精子形成時のミトコンドリアの分裂についての細胞学的研究で取られており、学生にもクモガタ類の分類や細胞学的研究を薦められたようである。佐藤博士は日本蜘蛛学会（当時は東亜蜘蛛学会）の設立発起人の一人であり、サソリモドキの生態についての詳しい報文が *Acta Arachnologica* 誌にも出ている。鈴木先生が入学した頃、佐藤講師のもとでは学生の友廣賢氏が広島市の近郊にある極楽寺山から採集したあるザトウムシを材料に使用して染色体の研究をしていたが、その種名がわからない。研究室に教室の阿部余四男教授（1891-1960。アベサンショウウオ *Hynobius abei* は同氏に因んで佐藤井岐雄氏が命名。「三太郎の日記」の阿部次郎は兄にあたる）がドイツ留学の際に購入してきた Carl F. Roewer (1923) の *Weberknechte der Erde* (世界のザトウムシ) というモノグラフがあったので、佐藤博士が鈴木先生に研究を依頼したのである。鈴木先生に白羽の矢が立ったのは、鈴木先生が高等師範学校時代の夏季休暇中に東京の語学学校でドイツ語を学んでいてドイツ語の読み書き能力が他学生よりも抜きんでていたからだった。調べたところ、その種は新属新種であることがわかったので *Gagrellopsis nodulifera* と名づけて論文を作成し、それをドイツの著名な動物学の雑誌 *Zoologischer Anzeiger* に発表した (Sato & Suzuki 1939)。これが処女論文だと、私は鈴木先生から伺ったことがあり、ご自身もあるところで (鈴木1978) そのように書かれているが、実際には他の材料を扱ったものでこれより1年早く出ている論文が2編ある（そのうちの1編も *Zoologischer Anzeiger* 誌である：Sato & Suzuki 1938—そこで新種として記載されているのは "*Akalpia nipponica*" と名づけられた種であるが、図を見るとこれは現在 *Melanopa grandis* の本州型に相当する）。友廣氏が扱ったこのザトウムシ（和名はイラカザトウムシ）の染色体の論文は、その新種記載の翌年に公表されている (Tomohiro 1940)。日本産のザトウムシで最初に染色体数が報告された論文はこれである。

鈴木先生は広島文理科大学を1940年に卒業し、翌年から1946年まで兵役（陸軍中尉）につかれたので在学期間はわずか3年であるが、この間に佐藤博士の愛媛県石鎚山や香川県琴平宮などへの採集旅行に同行されている。また、同期の宮本正一博士（1913-2010。水生半翅目の分類研究で有名）といっしょに長野県の上高地に徳本峠を越えて採集に行かれた話などもよ

く聞いた。ビニール袋などはない時代だったので、アルコールの管ピンなど液がもれる心配のあるものは油紙に包んでいたそうだ。このときの採集品は上記の "*Akalpia nipponica*" のほか、初期の記載論文数編に用いられている。在学中に発表されたか、発行が兵役期間中であるため原稿は在学中に用意されたと考えられる論文は全部で17編あり（うち1編はウォーレス線をまたぐ哺乳類の生物地理を扱っているが、残りはザトウムシの分類の論文）、おそるべき勢いで研究に邁進されたことがわかる。卒業後、兵役につくまでの間に佐藤博士の副手を務めた期間があるようであるが（稲葉 2005）、正確な時期はよくわからない。

兵役中に長く滞在された台湾から復員後、鈴木先生は1946年4月に広島文理科大学の助手となり、原爆で壊滅状態となった動物学教室の再興に尽力された。残念ながら佐藤井岐雄博士は出勤途中に原爆の直撃を受けられ前年の8月11日に帰らぬ人となっていた（佐藤博士の業績と亡くなられるまでの経緯は、宇都宮 2001, 2002 に詳しい）。その後、1948年4月には講師、1952年5月には助教授に昇進されたが、おそらく講師になられた頃から、真正クモ類の細胞学で博士論文を完成させることをめざし、クモの染色体を精力的に研究された。これは、分類研究では学位取得に時間がかかりすぎると考えたからだそうであるが、この事情は佐藤井岐雄博士がサンショウウオ分類学でなく、サソリの精子形成で学位を取得されたのと似ている。完成した論文は北海道大学に提出し、1952年に理学博士の学位を得られた。主査は日本における動物染色体研究の第一人者であった牧野佐二郎教授で、これは牧野教授が出した学位の第一号にあたと聞いた。これらの成果は1950年から1954年までの間に4編の英文論文として出版されているが（Suzuki & Okada 1950; Suzuki 1951, 1952, 1954）、なかでも完結編である1954年の論文（学位論文の本体に相当）は17科57種のクモで染色体を新たに報告するとともに、それまでに染色体の報告のあるすべてのデータ（約180種、うち、約100種は鈴木先生が報告されたものである）をまとめてクモにおける染色体進化を概観した労作で、クモの染色体の研究論文では現在でも必ず引用される古典となっている。鈴木先生は、これが動物染色体研究の第一人者であった M. J. D. White 教授の「*Animal Cytology and Evolution*」に引用されたことを誇りとされていた。本書は第2版が1954年、第3版が1973年の発行であるが、そのいずれにもその時点までに出版されていた鈴木先生のすべての論文が1950年の遺伝学雑誌での和文講演要旨1編とともに引用されているのである。クモの染色体数(2n)は、最少のミヤグモの2n=7(♂, XO型なので♀では2n=8)から最多のキムラグモの約94(♂, X₁X₂O型)まで大きくばらつくが、その両方ともが鈴木先生が報告したもので、これらの両末端記録はいまだに破られていない（真正クモ類の染色体を現在精力的に研究しているチェコの Jiří Král 博士が、あるクモでキムラグモを超える染色体数を2010年のポーランドでの国際クモ学会議で報告していたが、原著論文はまだ出ていないと思う）。当時の染色体研究は精巣をパラフィンに包埋して連続切片をつくるという方法でなされていた。これは今日用いられる空気乾燥法と比べてはるかに手間がかかる手法である。クモの精巣は柔ら

かい管状の組織でありそのまま包埋すると精巣が行方不明になりがちなので、精巣をタンポポの舌状花の筒へ入れてそれをまると包埋することでその不便を解決したと聞いた。

このレビュー（Suzuki 1954）では、最多の染色体数(2n)がキムラグモ類の約94で、次に多いのがジグモの約44、新蛛類ではばらつきがあるが圧倒的多数は24-30の間であるという事実から、真正クモでは全体として染色体数が少なくなる方向に進化したと推定されている。これに対して、Platnick & Gertsch (1976) は真正クモ類の最近縁群と考えられるウデムシの1種 (*Sarax sarawakensis*) で2n(♂)=49 (=48+X) という染色体数が報告されていることを理由に、キムラグモ類での多い染色体数は、より少ない染色体数から進化した派生形質状態だと判断した。外群比較を適用すれば、この判断は妥当であるが、染色体数は一つの単系統分類群内でも比較的变化しやすい形質であり、多くの種で調査が進めば、ウデムシの中でも染色体数は大きく変異している可能性は残されている。クモでは、性染色体システムは最も多いのがX₁X₂O型で、XO型、X₁X₂X₃O型の種が若干あるが、XY型や雌ヘテロの性決定は見つかっていない。各染色体はほとんど一様に端部動原体型であるが、ヒナハグモ、ミヤグモ、ユウレイグモの3種ではすべてが中部動原体型染色体であることなどもこの鈴木論文によってはじめて明らかにされた事実である。パラフィン切片法は、その後開発された押しつぶし法や、今日標準となっている空気乾燥法と比較して、核型分析にはあまり向いていない手法であり、この一連の仕事で染色体数が既報となった種についても、核型については現在の手法で再度観察しなおす価値がある。この論文には今後の研究のヒントもちりばめられている。たとえば、オニグモ属のほとんどの種が2n=24(♂, n=11+X₁X₂)であるのに対し、オニグモ *Araneus ventricosus* は2n=46(n=22+X₁X₂)と常染色体数がちょうど2倍になっている。これがどのような過程で産みだされたのかなどは、今後追求すべき課題だろう。

1953年4月に配置換えで広島大学理学部助教授となったあと、鈴木先生は1960年6月から約半年間、米国のPurdue大学、California大学などへ出張、1968年7-8月に短期の調査で中華民国に出張などをされているが、もっとも重要な国外出張は1971年8月から11月までのチェコスロバキア、ドイツ連邦共和国、英国への出張である。チェコスロバキアのブルノ（現在はチェコ）での国際クモ学会議出席・発表をかねたもので、これがこの会議への日本人研究者の初参加だった。大会後、フランクフルトのゼンケンベルク博物館や英国の大英博物館などを訪問し、前述のRoewerをはじめとする、かつて欧州の研究者によって記載された日本産のザトウムシのタイプ標本を広範に調査された。本類の戦前の記載論文が生殖器の記載を伴っていることは稀で、欧米の研究者が日本産として記載した種の多くが正体不明として残されていたので、このタイプ標本の検査は重要な作業だった。

この欧州滞在中タイプ標本をあらかじめ調査し、それまでの疑問点や研究上の障害がいきなり解決したことが契機になったと想像されるが、この後の鈴木先生のザトウムシの分類での仕事の充実ぶりは目覚ましかった。私は1974年4月に広島大学理

学部生物学科動物学専攻に入学したが、おそらくこの頃が鈴木先生のザトウムシ研究ではもっとも自信と活力のみなぎっていた頃ではなかったかと思う。入学してすぐ、はじめて研究室にお邪魔したときにいただいたのが琉球列島のザトウムシの分厚いレビジョン (Suzuki 1973) の別刷で、その後も次つぎと分類群別のレビジョンを完成していっておられた。退官の時期が近づいており、停年までにできるだけ多く片づけたいという気持ちも後押ししていたと思われる。この頃の、ブラシザトウムシ属 (*Sabacon*: Suzuki 1974)、ミツヅメザトウムシ科 (Trianaonychidae: Suzuki 1975)、スベザトウムシ属 (*Leiobunum*: Suzuki 1976b) などの日本産種のレビジョンでは、交尾器形態はもちろん、分布の同所・異所関係、地理的変異などに基づいて種群、代替種関係、種、亜種が認識されており、地理的分化をとまなう低拡散性の動物での種の認識や記載論文の手本となる論文だった。この時期には、国外産のザトウムシでも、フィリピン (Suzuki 1977a) や台湾 (Suzuki 1977b) などの大きなモノグラフを出されている。

2007年に出たザトウムシ類の分類と生物学の専門書「*Harvestmen. The Biology of Opiliones*」(Pinto-da-Rocha et al. 2007)には、ザトウムシで記載種数の多い研究者10傑の写真が出ているが(p. 7)、その一人に鈴木先生が入っている。種数の多い順から数えると6位のようなのだが、記載論文の質でいえば、その10人の中では、ドイツのJochen Martens博士と並んでトップだと思う。米国でザトウムシ類やヤスデ類の分類研究を長年先導しているWilliam Shear教授は、ザトウムシ研究者間で作っているメーリングリストに私が鈴木先生のご逝去の報を伝えたとおり、次のような哀悼の辞を寄せられた：「鈴木博士のご逝去は、ザトウムシ研究の一時代の終わりを告げている。彼は真のパイオニアだった。彼の東南アジアのザトウムシに関する数々の論文は、正確な記載と、明快で、かつ、ほとんど芸術的な域といってもいい描画の手本である。熱帯地方の研究が進むにつれ、彼の名声はきっとますます増大してゆくことだろう」(Opiliones ML: 2011/7/10 づけ)。

以下から私の個人的なかわりをまじえることをおゆるし願いたい。私は高校時代にザトウムシに興味をもち、生物学科のある大学で、クモガタ類の分類の研究ができそうところが他になかったこともあり、自然と広島大への進学をめざした(じつは、もう一つ今村泰二先生のおられた茨城大学という選択肢があったが、四国の松山に住む高校生には距離がありすぎた)。広島大学は当時入試の科目が4教科しかなかった(センター試験はおろか、共通一次試験が始まるよりも前である)、理学部の入試には社会科がなかったため、人に負けない自信のある科目が世界史や日本史だった私は、もし鈴木先生がおられなかったなら、ここを受験することはまずなかった。また、入学してからずっとあとになってわかったことだが、私が卒業予定の年に鈴木先生もご退官(当時の広島大は63才で退官)だったので、浪人するときわめて具合が悪かったはずである。広島大学の動物学教室にはザトウムシはおろか、分類学や生態学を専攻されているスタッフは他におられなかったからである(尾道の向島臨海実験所だけには少しおられた)。いま思うと冷や汗がでそ

うである。

入学してすぐに理学部の建物の1階の北側の棟の中庭側に面する位置にあった鈴木先生のお部屋を初めてたずねたときのことは今でもよく覚えている。このときたぶんそれまでに自分の中でくすぶっていた不明点をいくつかお尋ねしたが、その一つがオオナガザトウムシ *Melanopa grandis* だった。私が高校時代によく通った松山市南方にある皿ヶ嶺という山には全身が黒茶褐色で大型だが図鑑でも名前のわからないザトウムシがいた。その標本を、高校2年の頃に新居浜東高校の国田利明先生(広島大鈴木研究室のご出身で、愛媛県のザトウムシについて鈴木先生と共著の論文を書かれていた：鈴木・国田1972)に送って見ていただいたところ、オオナガザトウムシだとの返事をいただいたのだが、北隆館の新日本動物図鑑に出ている図とあまりにも異なるので、同定間違いではないかという疑問をずっと抱いていたのである。携えていった標本を鈴木先生に見ただくと、意外にも、それはやはりオオナガザトウムシだという返事だった。そして、本種は体のサイズやプロポーション、生殖板、触肢の形態などに地理的分化がはげしいこと、そして、新日本動物図鑑に出ている長細い体形の雄の図は鳥取県の大山産の標本で描かれており、愛媛県の集団とは別種にみえるほど外見が異なること、などを、論文(前述の1971年のチェコでの国際クモ学会議での発表論文のプロシーディング：Suzuki 1972)の図を拡げながら、少なくとも現時点で形態的にも多様化の著しいこれらの集団を同一種扱いとするのがなぜ適切かという理由とともにあれこれ説明していただいた。それまで愛媛県に生息するザトウムシしかみたことのなかった私にとって、ザトウムシの仲間の地理的分化の奥行きをまざまざと見せつけられた思いだった。

これ以後、80%エタノールと管ピンをわけていただいて、夏休みや秋休みの帰省中などにはバイクを駆って愛媛県各地でザトウムシをせっせと採集し、休みが明けると採集したザトウムシ標本をおみやげとして届けることを口実として鈴木先生のお部屋を訪ね、またいろいろな話を伺うということを繰り返すようになった。鈴木先生は話好きで、一度訪ねると話が延々ととぎれず長時間に及ぶということが毎度だったので、お部屋の入口の戸をノックする前に必ずトイレを済ませておくことはきわめて重要だった。鈴木先生は香りのよいたばこをパイプで吸われていて、研究室はいつもよい香り(たぶんエタノールやそれが酸化してエステルになった匂いも混じって)がしていた。この研究室のあった理学部の建物は被爆建物で、現在も東千田町の東千田公園の中に残っているのは嬉しい(残念ながら、中が見物できない)。

大学2年の夏(1975年7月21日~8月9日)に、鈴木先生の科研費での調査の手伝いで、北海道と東北の八甲田・十和田・八幡平周辺を採集旅行したことも私のその後の進路や研究テーマの選択のうえで大きな糧となった。この旅行では前半、広島を出発してから北海道に入って大雪山(湧別から旭岳中腹まで上がり、また、天人峡まで歩いた)と知床までは鈴木先生と同行したが、鈴木先生は石鏡山での4年生の生態学野外実習を引率するために一足先に帰られ、そのあとは私一人で回った。

20日間だったのは国鉄（JRの前身）の北海道・十和田周遊券の有効期間がこれだったからである。私は東京よりも東への旅行はこれが初めてだったが、そもそも一人旅というものがこれが初体験で、その少し前まで時刻表の使い方さえよく知らなかったのである（帰りの上野駅で東京駅での国鉄線の乗り換えを間違えないでできるかもけっこうプレッシャーだった）。山登りとキャンプは慣れていたがテントやコンロは自分では持ってなかったの、八甲田山酸ヶ湯での何日かの野営のためにダンロップの1~2人用カラコルムテントとプリムス8Rというホワイトガソリン使用のコンロを広島市の好日山荘で買って旅行中持ち歩いた。北海道でのツタウルシの洗礼もこのときにはじめて体験した。ツタウルシは中国地方や四国の山にも少なくないのだが、それまで私は植物かぶれというものを経験したことがなかった。大雪山湧駒別では北海道教育大学の宿泊施設を利用させてもらったが、ここでの最後の夜、大学院はどこに行くのがよいか鈴木先生にお尋ねすると、広島大だけはよしなさい、いろいろな面で北大がよいのではないか、という助言をいただいた。広島大だけはよしたほうがよいということの意味は、この頃に動物学教室に在籍した者にはそれとなくわかるはずだが、ここでは深入りしない。この調査行は、残念ながら前半の北海道は時期が少し早すぎて採集品の多くが幼体だったが、東北での成果は上々で、広島に帰った翌日の10日は日曜だったが、夕方に研究室に行ってみると鈴木先生がおられたので、標本を届けた。鈴木先生は石鎚山での生態学野外実習の帰途、奈良県の大台ヶ原山へ回られ染色体検査のためコウヤスベザトウムシの成体を生かして持ち帰られていて、染色体も押しつぶし法ですでに調べ終わっておられた（ $2n=20$ というこれまでになかった数がでたとのことだった）。翌日、午前中に再び研究室を訪ねると東北の採集成果に鈴木先生は上機嫌で、大学の近くの店に連れて行かれて豪華な昼食をご馳走になった。この東北旅行での採集品をタイプ標本として鈴木先生によって新種記載された種が2, 3ある。大学卒業後、私は結局、北大の大学院に進学したが、そこでの研究テーマ選びにこのときの採集行での成果と経験はかなり影響した。

これ以外にも、鈴木先生とごいっしょした旅行は、大学4年の夏の鳥取県（1977年8月6~8日。当時、内地留学で広島大にこられてクモの染色体を研究されていた倉吉東高校の國本洗紀先生が帰省されるのに同行させていただいたもので、同期の小松洋君もいっしょだった）、同年の秋（10月20日~11月5日）の沖縄本島と石垣島・西表島の採集旅行（小松君、佐藤正典君など数人も同行し、沖縄本島では当時普天間高校におられた下謝名松栄先生が案内してくださった）など、数回あり、いずれもそれぞれ印象深いのだが、長くなるのでここでは割愛する。ともかく、このような採集機会や研究室での長時間におよぶザトウムシ学講義（ザトウムシとは関係ない話はもっと長かった）のおかげで、何がわかっていて何がまだわかっていないのか、またわかっていることのうち、どこまでが論文になっていてどれが未発表か、といったもろもろのことを広島大学での4年間で自然と身につけられたことの意味は私にとって大きかった。

1978年3月にご退官ののちも鈴木先生は、ご自宅で精力的に研究を続けられておられ、コペンハーゲン博物館から依頼されたタイのザトウムシのレビジョン（Suzuki 1985a, b）など大きな論文を出されていた。1981年の夏（7月14~19日）には、鈴木先生が札幌に来られ、そのころ医学部のウィルス部におられた綾隆夫先生（鈴木研究室の卒業生で、北大の大学院に進学し牧野先生の研究室に入られた）といっしょにお相手した。その間、北大理学部附属の染色体研究施設（染色体研）に鈴木先生のお共で2回ほどお邪魔した。じつはその少し前に、私は染色体研の佐々木本道先生のはからいで（佐々木先生に取り次いでくれたのは私と同郷で同施設の院生だった阿部健治君だった）、当時助手をされていた高木信夫先生（X染色体の不活性化などに関する研究で著名）から高木先生がふだんマウス胎仔の染色体標本作製で使われている乳酸と酢酸の混合液で細胞を解離させる方法を使った空気乾燥法というのを教えていただくことになっていたのだが、ちょうどよい機会だったので、鈴木先生がおられる間の7月16日に、その方法を教わった。鈴木先生が札幌に来られる直前に青森県の十和田湖に立ち寄ってヒラスベザトウムシ（そのとき湿度維持のためにビニール袋の中に同封されていた植物の枝葉がツタウルシだったのを見てドキドキした）を採集してこられていたので、たしかそれも材料に使わせていただいたかと思う。雌の卵巣だったが、染色体がきれいに数えられて驚いた。ヒラスベザトウムシは産雌単為生殖種であり、倍数体の存在を疑っていたのだが、私がそれまでにやっていた押しつぶし法や、ふつうの空気乾燥法では卵巣では染色体数が数えられるような分裂像が得られず、それが解明のハードルになっていたのである。その雌で現れた染色体数は、雌雄がいる信州の集団の雄で先に私が確認していた $2n=24$ のちょうど倍の数だったので、いっきに展望が開けた思いであった。

学位論文がクモの染色体研究であったように、鈴木先生は染色体観察を自家葉籠中のものとされており、ザトウムシの分類研究にも早くからその情報を使おうとされていた。最も早くそれが利用されたのはユミヒゲザトウムシ種群（*Leiobunum curvipalpe*-group）という日本のブナ帯以上の山地に多いザトウムシの一群である。タマスベザトウムシ *Leiobunum tamanum*（現在はヒライワスベザトウムシの西関東型）の新種記載が含まれる1953年の論文では（Suzuki 1953）、外見の類似に比して多様度の高い交尾器形態に加えて染色体数の違い（ヒライワスベザトウムシ、タマスベザトウムシ、ユミヒゲザトウムシはそれぞれ $2n$ で18, 22, 24と異なる）が記載されている。また、同じ種群に属するヤマスベザトウムシ *Leiobunum montanum* の石鎚山の集団と伯耆大山の集団は、生殖器の形態差は著しくはない（よって最初に記載された1953年の時点では同種として扱われた）が、染色体数はそれぞれ $2n=24$ と $2n=18$ で、相互にかけ離れている（Suzuki 1976a）。このことを理由に1976年の本種群を含むスベザトウムシ属のモノグラフ（Suzuki 1976b）では、両者は独立種とされた。また、残念ながら講演要旨のみで論文として公表されていないが、アカサビザトウムシ *Gagrellula ferruginea* でも染色体数が地理的に大きく変異することに早くから気づかれている（鈴木 1956）。この頃は染色体

数の違いは交配後生殖隔離に一定の機能をもつだろうという前提で染色体情報を分類に利用しようとしていたのである、しかし、私は博士論文のテーマとして選んだユミヒゲザトウムシ種群の分類研究のため各地の集団で染色体の調査を進めるうちに、その前提はかなり割り引いて考えなければならないという考えにいたった。染色体数の地理的分化パターンと外部形態のそれは一致しないということ、また、染色体数の異なる2つの集団が接触する場所では雑種核型の個体が多数出現する交雑帯がふつうに見つかることがわかってきたからである。しかし、染色体数の差が2本や4本くらいだとそれが生殖隔離に直結することはないが、その差がもっと開くと話は違うかもしれない。鈴木先生が先鞭をつけたアカサビザトウムシではそのようなことが起きていると示唆される場所がいくつか見つかりつつある。

鈴木先生の退官後の一大目標が日本産のザトウムシのモノグラフの完成で、私はご退官から何年かのちに広島市西白島町のご自宅をお訪ねしたときに、8割方はできたというその原稿の束を見せていただいたことがある。その完成と出版を心待ちにしていたが、その後、地区の老人会の世話を頼まれてなかなか時間がとれなくなったとかで、完成したという報に接しないままに時間が過ぎた。1997年11月に鳥取の私の家に鈴木先生が来られて（東海大学出版会の「日本産土壌動物」のザトウムシの原稿の相談という用事があった）1泊されたとき、くだんの原稿のことにふれ、「わしに何かあったら君、あとをよろしく頼むよ」などと言われたりしたので、お手伝いできればよかったのだが、私も自分の仕事で手一杯でついそのままになってしまった。鈴木先生の奥様のお話によると、最後まで元気だったがこの10年くらいは研究らしいことをしているようすはなかったとのこと。老人会の会長などで忙殺されている間に原稿のほうを完成させる気力が途切れてしまったのかもしれない。鈴木先生の写真が載っている前述の「Harvestmen. The Biology of Opiliones」が出版された折に1部お送りしたら（私も細胞遺伝学や一部の分類群の章を執筆したので）、喜んで読んでおられたとお聞きした（ご自宅にあった同書を見ると、ところどころに鉛筆で線がひかれており、たしかに読まれた形跡があった）。今年の7月に鈴木先生の蔵書整理にご自宅にうかがったときに、その原稿がいちばん気がかりだったのだが、残念ながら私がかかって目にした一式にまとめられたものを探し出せなかった。かわりに、その原稿の一部ではなかったかと思われる手書き原稿が、異なる複数のファイルにばらばらに保管されているらしいことには気づいた。鈴木先生のお宅から段ボール箱20個ほどに入れてお預かりしてきた資料はまだ整理にほとんど着手できておらず、原稿がどこまでそろっているか不明だが、可能なかぎりなんらかの形で公表する道を探りたいと考えている。

ザトウムシおよび他のクモガタ類関係の鈴木先生のご蔵書は、奥様の昭子様とご長男の正典様のご厚意により、ご自身の論文別刷多数とともに一式を私のところでお預かりしている。整理が終わりしだい、リストをPDFファイルとして公開し、クモ学会の会員諸氏には利用の便をはかる予定である。

文献

本文中に引用した鈴木先生の論文については共著者の有無と無関係に一括して発行年順とした。

- 稲葉明彦 (2005) 文理大懐古. pp. 4-10. In: 岡田孝章 (編) 追懐広島文理大. 尚志会 (広島市), 83 pp.
- Platnick, N. I. & Gertsch, W. J. (1976) The suborders of spiders: a cladistic analysis (Arachnida, Araneae). *Am. Mus. Novitates*, No. 206, pp. 1-15.
- Pinto-da-Rocha, R., Machado, G. & Giribet, G. (eds.) (2007) *Harvestmen. The Biology of Opiliones*. Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 597 pp.
- Sato, I. & Suzuki, S. (1938) Eine neue *Akalpia*-Art aus Japan. *Zool. Anz.*, 124: 85-89.
- Sato, I. & Suzuki, S. (1939) *Gagrellopsis*, eine neue Gattung der Phalangiiden aus Japan. *Zool. Anz.*, 126: 89-94.
- Suzuki, S. & Okada, A. (1950) A study on the chromosomes of a spider, *Heteropoda venatoria*, with special reference to X_1 -, X_2 - and X_3 -chromosomes. *J. Sci. Hiroshima Univ.*, Ser. B, Div. 1, 11: 29-44. pls. 1-3.
- Suzuki, S. (1951) Cytological studies in spiders. I. A comparative study of the chromosomes in the family Argiopidae. *Jour. Sci. Hiroshima Univ.*, Ser. B, Div. 1, 12: 67-98. pls. 1-5.
- Suzuki, S. (1952) Cytological studies in spiders. II. Chromosomal investigation in the twenty two species of spiders belonging to the four families, Clubionidae, Sparassidae, Thomisidae and Oxyopidae, which constitute Clubionoidea, with special reference to sex chromosomes. *J. Sci. Hiroshima Univ.*, B-1, 13: 1-52.
- Suzuki, S. (1954) Cytological studies in spiders. III. Studies on the chromosomes of fifty-seven species of spiders belonging to seventeen families, with general considerations on chromosomal evolution. *J. Sci. Hiroshima Univ.* (B-1), 15: 23-136, pls. 1-15.
- 鈴木正将 (1956) 邦産 *Gagrellula* 属メクラグモの分類と核学的研究. (講演要旨). *動物学雑誌*, 65: 161.
- Suzuki, S. (1957) On the three closely related forms of the genus *Liobunum* (Phalangiidae, Opiliones). *J. Fac. Sci. Hokkaido Univ.* (VI) *Zool.*, 13: 109-117.
- 鈴木正将・国田利明 (1972) 愛媛県のザトウムシ類. In: 愛媛県高等学校教育研究会 (理科教育部会) (編) *愛媛の生物*, pp. 89-94.
- Suzuki, S. (1973) Opiliones from the South-west Islands, Japan. *J. Sci. Hiroshima Univ.* (B-1), 24: 205-279.
- Suzuki, S. (1976a) Cytotaxonomy in some species of the genus *Leiobunum* (Opiliones, Arachnida). *Proc. Japan Acad.*, 52: 134-136.
- Suzuki, S. (1976b) The genus *Leiobunum* C. L. Koch of Japan and adjacent countries (Leiobunidae, Opiliones, Arachnida). *J. Sci. Hiroshima Univ.* (B-1), 26: 187-260.
- Suzuki, S. (1977a) Report on a collection of opilionids from the

Philippines. *J. Sci. Hiroshima Univ.* (B-1), 27: 1-120.
 Suzuki, S. (1977b) Opiliones from Taiwan (Arachnida). *J. Sci. Hiroshima Univ.* (B-1), 27: 121-157.
 鈴木正将 (1978) 忘れぬひとびと. 理学部通信 (広島大学理学部コミュニケーション委員会), No. 78, pp. 3-4.
 Suzuki, S. (1985a) A synopsis of the Opiliones of Thailand (Arachnida) I. Cyphophthalmi and Laniatores. *Steenstrupia*, 11: 69-110.
 Suzuki, S. (1985b) A synopsis of the Opiliones of Thailand (Arachnida) II. Palpatores. *Steenstrupia*, 11: 209-257.

Tomohiro, M. (1940) On the chromosomes of the harvester, *Gagrellopsis nodulifera*. *J. Sci. Hiroshima Univ.* (B-1), 7: 157-168.
 宇都宮妙子 (2001) 佐藤井岐雄教授追憶の記 1. 両生類誌, No. 7. pp. 39-44.
 宇都宮妙子 (2002) 佐藤井岐雄教授追憶の記 2. 両生類誌, No. 8. pp. 25-32.

鶴崎展巨

Obituary: Prof. Seisho Suzuki (1914-2011). By Nobuo Tsurusaki

日本蜘蛛学会第 43 回大会

43th Annual Meeting of the Arachnological Society of Japan August 27-28, 2011, Tottori University, Tottori

日本蜘蛛学会第 43 回大会に参加して

2011 年に蜘蛛学会に入会させていただきました新参者の小池と申します。京都大学修士課程 2 年目、ヤチグモ・ナミハグモが好きです。田中一裕先生から「小池くん、大会の感想書いてよ」とご指名を受けましたので、思うままに大会の印象をつづらせていただきますが、歴史と風格のアクタが僕の雑文のせいで切ないことになりますよ？ では本大会に先立って行われたプレシンポジウム編からどうぞ。

プレシンポジウム前日, 8 月 25 日 木曜日。

ぎりぎりになってナミハグモポスターを完成させた私は京都で研究室の先輩と雑談。

先輩 「学会どこよ？」

小池 「鳥取です。行ったことないんで楽しみなんですよ～」

先輩 「飛行機？」

小池 「電車です。」

先輩 「…君はスーパーはくとのことを言っているのかね？」

小池 「確かそんな名前でした。」

先輩 「おまえ小池, この馬鹿野郎! はくとは電車じゃない!… 貴重なディーゼル車なんだよ!! ウンたらカントラ…!」

プレシンポジウム, 8 月 26 日 金曜日。

京都駅でディーゼル車「スーパーはくと」に乗りこみ, 人生初の鳥取県入りです。会場は鳥取大学。普段私が棲息している京大に比べ建物・諸施設のなんと新しく美しいことか。図書館の放出や資料配布を期待して早めに乗りこんだのですが, すでに先客が多数おられました。1 年ぶりのあいさつを諸先生方, 同好の士と交わり, 全国のクモ屋が 1 つの部屋に集まっているという異常な状況を楽しみました。異常といえば, 前回の東京大会になかったものとしてテレビクルーの存在が挙げられます。大会中ずっと取材されてきましたが, いったいどんな番組になったのでしょうか…。



写真 1 大会会場となった鳥取大学の正門。立派な看板がお出迎え (写真と説明は田中一裕)



写真 2 大会会場となった地域教育学部。強い日差しのおかげで、足早に会場にむかう。